HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	植民地期朝鮮における「迷信」の問題の研究［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	宮内, 彩希
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13711号
Issue Date	2019-09-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/76330
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Saki_Miyauchi_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　宮内　彩希

主査　教　授　権　錫永
審査委員　副査　教　授　白木沢　旭児
副査　教　授　櫻井　義秀

学位論文題名
植民地期朝鮮における「迷信」の問題の研究

当該研究領域における本論文の研究成果　本論文は、朝鮮の民間信仰が「迷信」として位置づけられ、変容していく過程を論じる。

朝鮮の巫俗信仰を含めた民間信仰については、宗教学・民俗学的研究が主流で、歴史学ではあまり注目されてこなかった。また、日本の植民地をめぐる研究では、軽犯罪などを含む「日常的抵抗」に関する研究の必要性が指摘されながらも、研究が進んでいないのが現状である。

こうした研究状況に対して本論文は、日韓両国の新史料を発掘することによって、第一、「迷信」をめぐる朝鮮総督府・警察・朝鮮の言論と青年団体・民衆といった様々な主体の間の複雑な関係性を明らかにすること、第二、「迷信」として打破すべき対象とされていた巫俗信仰が、政治・学術・文化の観点から研究・記録されるものへと変容していく様子とその結果を明らかにすること、を目指す。

本論文の当該領域における研究成果は以下の通りである。

本論文は、生活文化としての民間信仰の歴史的な展開を論じた文化史研究として、朝鮮の民族主義、朝鮮総督府政策史、朝鮮の民俗学の三つの分野にまたがる研究であり、いずれにおいても大きく貢献するところがあったと判断される。

具体的には、第一に、朝鮮の民間信仰に関する文化史研究として、民間信仰が文明開化の流れのなかで「迷信」として規定され、それが、統治者が取って代わられた植民地期に引き継がれ、やがて研究対象として見直されるようになるまでの歴史展開を綿密に記述したもので、高い学術的な意義が認められる。

第二に、朝鮮の民族主義の観点から見て、近代化、民族発展を目指した朝鮮の民族主義が民間信仰を「迷信」と規定して撲滅を図りながらも、韓国併合により、その企図が朝鮮総督府に委ねられたこと、言論活動が許された文化政治期には、朝鮮の民族新聞や青年団体が朝鮮総督府に対して、より根本的で厳しい「迷信」の撲滅を要求し続けていたこと、を明らかにすることにより、言論を中心とする朝鮮の民族主義陣営が総督府の統治を容認する奇妙な関係となっていたことが浮き彫りになった。それは、植民地の重要な一面を指摘したものとして、植民地研究全体への貢献が認められる。

第三に、政策史の観点から見て、（一）朝鮮の民間信仰を「迷信」と規定しながらも、朝鮮の民族主義の場合と違って、その政策が、根本的な啓蒙よりも「迷信犯罪」の取締に限定されていたこと、（二）巫俗を「類似宗教」に分類して、日本人によって組織された崇神人組合に許可を与え、この組織を通してムーダン（巫俗行為を行う女性）を管理・統制したこと、を明らかにしており、（三）これらの結果として、朝鮮総督府の「迷信」政策が民衆一般への直接的な関与を避けつつ、合理的かつ巧妙に管理・統制する性格のものであったことが明らかとなった。また、このような点で、朝鮮総督府は根本的な「迷信」撲滅を求める民族主義言論と相容れない関係にあったことと、政策の植民地的性格が明らかとなった。

第四に、民俗学の観点から見て、民間信仰の歴史や機能などが学術的に研究・記述されること

になり、その結果として、民俗学資料が蓄積されたことを示し、それに拠りながら、当時の民間信仰の実態を記述したことが貢献として認められる。

以上の点に加え、本論文は韓国語の研究論文や史料を大量に読み込み、活用した本格的な朝鮮研究として、韓国での高い評価も期待できる。

ただ、「迷信」という、どの社会にも起こりえた普遍的な問題を取り扱うにもかかわらず、世界的な視点が弱いことや、ムーダンへの関心に比べ、民間信仰の主体としての庶民への関心が弱いこと、といった課題が指摘された。

しかし、このような課題は、さらなる研究の発展のために必要とされるものであり、上述の研究成果をいささかも損なうものではない。

学位授与に関する委員会の所見　以上の審査の結果、審査委員会は全員一致して、本論文の著者である宮内彩希氏に博士(文学)の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。